

昭和三十九年六月十二日 第一刷發行
昭和四十六年三月五日 第二刷發行

荷風全集第二卷

定價 八百五十圓

著 者 永 井 壯 吉

發 行 者 岩 波 雄 二 郎

發 行 所

東京都千代田區一ツ橋二丁目五番五號
株式會社 岩 波 書 店

目 次

闇の叫び	一
地獄の花	三
新任知事	一七三
夢の女	三五
夜の心	三九一
燈火の巷	四三七
すみだ川	四六九
庭の夜露	四七七
後 記	五〇七

闇
の
叫
び

一

如何なる矛盾の存在をも許す、雜然たるこの社會の上に、只だ一ツ、成功と云ふ事を約束した鞍間秀輔は、今、冬の夜の暗い中に、突然、大きな出來事を見付け得たと思つた。

鋭い光と、嚴しい寒さを落す大きい月は、ちぎれ／＼になつた怪しい雲の間を急いで居る。櫻の枯木に粧はれた江戸川に沿うて、辛くも眠つて居る貧しい街は、忽然として、其の痛ましい零落のさまを凄慘極りなき、蒼白い光の中に現はすかと思ふと、又忽然として、限り知られぬ闇の底に沈んで行く。この闇の底には、平和と希望の聲は全く其の痕を斷つたのである。四邊には、一ツとして燈の影がない。折々の風に、櫻の枯葉の戦ぐ外には、近く製造場の機械が、衰へ萎む自然のこの悲しい聲に對して、正しく畏敬すべき其の勢力を誇るものゝ如く、物凄い夜を我がもの顔に、怖しい文明の吠聲を轟かして居るばかりであつた。鞍間秀輔は此の荒涼たる江戸川の堤の上に、さまざまなる心の惱を背負ひながら、其歩みを移した時、水に近く一人の少女が姿を認めたのである。少女の姿は如何にも激しい生存の争ひに疲らされたと云ふ風に、いや、一步進んでは、何か悲しい運

命に弄ばれて居るらしく思はれるのであつた。

絶えず暗くなり、又明くなる夜のさまは、彼をして仔細に、この怪し氣なる少女の様子を観察せしむる便利を與へて呉れる。彼はいつも物凄しい光を宿す其の眼に、猶精細なる注意を籠め、一間ほど離れた枯木の間に身を潜ませると、少女は何か深く途法に暮れて居る様子で、只ぼんやり、其の眼を、闇から闇に流れる水の上に注いで居た。

秀輔は我知らず呼吸をこらしたのである。彼は日頃から屢、監獄署の塀外、女工を養ふ製造場の附近、病院の周圍、富豪や貴族の邸宅近く、斯う云ふ邊を何がなしに歩いて見る事がある、そして、其等の場所から、何か或る事件を拾ひ出さうと急つて居るのであつた。けれども、現在の社會は兎に角に、彼が野心を満足せしむるには、餘り平穩に且つ清潔過ぎて居たのであらう。彼が成功の材料となるやうな、大きい秘密や面白い罪惡は、なか／＼路の傍に落ち轉がつては居なかつた。平和や幸福や德義や、美しいそれ等のものは、彼が眼には何等の趣味なく、又何等の必要あるものでも無かつたのである。此等のものは、要するに只彼等の空しき旗色であつた。ある成功を豫期する手段として、正義と云ふ旗色を利用したからには、彼は飽くまで、殊更に、この正義を標榜する爲めに、是非とも其の反面なる不義と不徳を捕へて來ねばならなかつた。次第に今少し暗黒なる社會を切望しなければ成らなかつた。彼は實に、此の如き地位に立つ新聞社の創立者として、頻に其の獲

物に餓ゑつゝあつたのである。で、今、思ひがけなく、この荒涼たる堤に佇む少女を見るや、早くもその心の中には、もし、この少女が近い製造所の女工でいゝもあつて呉れたなら、大方女工虐待と云ふやうな事件の糸口を捕へる事が出来はせまいか抔と、果しなき空想を描き始めた。

少女は猶暫くは佇んだ儘であつたが、聽て物凄^やい空の様子を見上げた後、如何にも力ない歩調で、川沿の棟割長屋の方へ歩いて行かうとして、又鳥渡立止つて了ふ。然し、五分程たつと、少女は又歩出して、今度は反對の方角にある製造所の方へ行きかけて、幾度か躊躇^{ためら}ふ様子である。此の有様を見る秀輔は最^もう堪らなくなつた。どうかして、言葉を交へる機會、其の事情を知る糸口を得たいと、悶えて居る處へ、丁度幸ひにも、何處^{どこ}から出て來たとも知れぬ一匹の大きな犬が、うろ／＼少女の方へ歩いて行くかと思ふと、氣味わるい聲で、長く遠吠をした。少女は吃驚^{びっくり}して、只「シツシツ」と震へながらに云ふばかり。寂寥^{さびやく}たる街の犬は、かの遠吠えに呼び誘はれて、忽ちの中に、物凄^やい聲で相應じながら五六匹も寄り集つて來る。彼は喜び勇んで、先づ最初に、洋杖^{ステッキ}で追ひ拂ひながら、少女の傍に進み寄つて、

「もう、大丈夫です。しかし此頃は病犬が居ないとも限らないから、早く家へお歸りなさい。」と覗く様に少女の顔を見た。

年頃はまだ十八九の、かなり美しい容貌^{ようばう}を持つて居る。そして、遠慮なく優しい笑顔^{えがほ}を作つて、

「どうも、有難う。ほんとに吃驚しちやツたのよ。」

軽い蓮葉の語調は、たツた今、深い憂愁に包まれて水の上に佇んで居た人の口から聞かれやうとは思はれぬ程であつた。彼は少しく呆氣に取られたやうになつて、其の顔を見詰めたが、然し暫くすると少女は又直以前の物思はしい様子になつて、頭を下げたなり佇んで居る。

「道でも迷つたのですか。」彼は聊か元氣を得て、「何なら、送つて上げても構ひません。」

「いゝえ、家は直ぐ彼處なんですけれど……。」と少女は口ごもつた。一時追ひ拂はれた犬は又何時の間にか、寄り集つて来る。

「其なら、早く歸つた方が可い。家には父さんや母さんが屹度心配して居るに違ひないから、何しろ此様寒い處に居るよりか。早く家へ歸つた方が……。」と彼は優しい聲で少女の心を感動せしめて、其となく話を引き出さうとするのである。

「旦那は、眞實に御親切ですね。」少女は人馴れて居る下層社會の娘だけに、少しも秀輔を恐るゝ色なく、いさゝか感じた様な調子を漏らすと、此の反應を得た彼は、ますゝ熱心な情を籠めた聲音を作つて、

「私はね、眞實に餘計なお世話だけれど、實の處は、先刻お前が石垣の上に茫然立つて居たのを見て、私は何か飛んでもない間違でもするのぢや無いのかと、實は吃驚したんだよ。」

「飛んでもない間違ひツて……？」と少女は男の顔を見たが、「まさか……其様無闇な事も出来ないけれど、あゝ——眞實に心配だわ。」覺えず漏らした嘆息、其に付け入つて彼は漸く話を進める事の出来る場合になつた。雲は又もや月を遮つて、互に顔も見分かぬ程なる深い闇の中に、恐らく惡魔の外には誰あつて、此の危險なる野心家の心を知るものがあらうか。

「なに、心配だつて……。何か其様に心配する事があるのかね。可哀さうに、まだ可愛らしい娘さんなのに、眞實にどんな心配事があるか知らないけれど、世間ほど憎らしいものは無い。どうしたんだか、私は眞實に姐さんの事が氣になつて來た。」

いかにも痛々しさに堪えないと云ふ様に、彼は手を取らんばかりに云寄るのである。少女は闇の中に又もや太い呼吸をした。

「姐さん。聞かしてもらへまいか。私の性分で、なんだか姐さんの事が、氣になるんだけど、通り掛りの私には、其様事は聞かせられまいねえ。」

月の光は又雲を免れた。少女は甚く耻らふ如く、あからめた顔をうつむけて、呼吸づかひをさへ急しくしたのである。

「姐さん。私が悪かつた。餘り出過ぎた事だつた。ねえ、お互に名前も知らないのに……姐さん、眞實に氣味の悪い人だと思ツたらうねえ。」

「……………」

「姐さんは何て云ふのかね。私は鞍間と云ふんだが……。」

少女はまだ顔を上げなかつたけれど、僅にお袖と云ふ其の名を告げ知らした。

「あゝ。さうか。何處か……見た處、何處か工場へでも稼ぎに行くのかね。」

「えゝ、あの、直ぐ其處の毛織製造場へ行くんです。」

彼は猶製造場の様子などを聞かうかとも思つたが、何うやら、一躰の事情が、最初想像した程、深刻なもので無さうに思はれて來たので、且つは、今の處餘り深入りして、怪しい者と思はれては却て何かの爲めに不利益だらうと思付いて、彼はもう立去らうと決心した。

「ねえさん、其ぢや、早く家へ歸るが可いよ。また悪い犬が來ない中にね……。」

「えゝ、ありがたう。」

彼は其儘歩み出して、驕で、窃と振返つて見ると、又もや暗くなる深い闇は、もう何處にか少女の姿を葬つて了つた。

二

辻車を呼んで、秀輔は飯田町の借家へ歸りかけたが、かの少女の姿が見えなくなると同時に、忽

ち殘惜のこりしいと云ふ感情が胸なかの中に滿ち渡つたのを覺える。一時は全くつまらぬ事のやうに諦めて了つたものの、今になると、何と云ふ事なく——殆ど理由と云ふものを發見し得ないのであるが、只だ何がなしに、彼の少女を其の儘に捨てゝ了ふのは殘念で、どうも面白い事件が引出し得らるゝ様な心持こころもちがしてならぬ。彼は車を下り、そして寢床に這入るまでも頻しきりに空想を逞たくましくして居たが、遂に、明日あしたは早速探訪たんぼうをやつて、如何なる事件が伏在して居るか、大方愚にもつかない事かも知れないけれど、萬一を頼みにして、先づ探索さして見るに越した事はないと思ひ定めた。

彼はいさゝかの資本主しほんぬしを探し當てゝ、新聞社を創立して以來、此處に六ヶ月ばかり。其の餌えさとして最も美味うまみある社會の罪惡を發見しやうとして、如何に其の鳥の如き眼と、狼の如き心を惱して居ただらうか。彼が故郷こきやうの綠なす野を去つて以來、三年の間、辯護士べんごしの食客になつて法學院を卒業した學歴と其後七八年の間は、幾度か辯護士の試験に落第した失望と、政治家の手先になつて政治運動に身を疲らした経験や、其から地方の新聞記者になつて、官吏侮辱とか或は脅喝取財とか、屢しばしば痛いたしい運命に遭遇した覺悟とは、頗る意志強き彼が材能を、猶能く修練せしめたと同時に、全く人間天賦の暖い性情を削そぎとつて了つた。彼が経験した小い多くの失敗は、遂に彼をして一攫千金と云ふ風な何か大きい事業の計畫のみを思はしめる様になつたが、商業上の智識を缺いて居る事を自覺して居た所から、自然と案内知れる新聞事業は、到頭とうとう此に實現される事になつたのである。彼は

怖るべく冷酷なる頭腦の判斷に因つて、成功には手段を撰ばないと云ふ主義を取る事にした。で、日々新聞の紙上には正義、自由と云ふ様な旗色はたじろしきの下に、政府、貴族に對する反抗の聲を叫んで、頻に讀者の注意を引かうと勤めたが、徒らに此の叫び聲だけでは充分なる成功を豫期する事が出来ないで、彼は此處に自然おのづと一ツの犠牲を要求したのである。外でもない。罪惡ある富豪か或は貴族を筆誅する爲めに、其等の富豪に苦しめられた一個人を捕へて來て、そして其の個人の爲め、乃ち廣くしては正義の爲めに爲す事あり。と云ふ様な面白い事件を起さねばならぬと思つたのである。月黒き江戸川邊だにに出會つた少女は、何か慙かう云ふ便宜になりはせまいかと云ふ點から、明日には最も鋭い探訪に其の身の秘密をさぐられて居たのである。

時計は今五時半を過した。社員はもう残らず立去つた後である。破産した洋服屋の建物を借受けた天井の低い二階の編輯局には、たつた一人、陰鬱な顔をした校正係が、汚れた壁によりかゝりながら赤いインキに染つた手で、辨當を喰つて居るばかりである。四五脚並べられた机の上や、其のあたりは、種々さまざまな紙屑で埒もなく埋められ、そして、今迄多くの人の呼吸こきふに汚された一室の空氣は、軽い臭氣と靄のやうな煙草の烟を含んだ儘、流通の路を失つて、どんより重く沈んで居るので、不健全と不整頓と亂雜とに支配されたこの編輯局は、今、灰色に曇つて了つた硝子窓がらすまどから這入つて來る幽鬱たそがれな黃昏の微光を浴びて、一見牢獄の如き觀をなした。正義、人道、自由、扨なほと名付けられた

美しい其等の叫び聲が、此の忘はしき光景を示す屋根裏から起らうとは、如何して想像し得られやう。

校正係は辨當の明箱を、床の上に抛投げた。出入口の障子を貫いて自在に侵して来る冷い凍つた空氣は、カタンと云ふ、地の底に響く様な物音を、長く引き傳へたが、其の時、障子の外から、

「探訪はまだ歸つて來ないか。」

「小石川へ行つたなりです。」校正係は答へた。

「さうか。」と室に這入つて、傍の椅子を引寄せながら、「君。電燈をつけ給へ。何をして居るのか、馬鹿に暇取らせるぢや無いかなア。」

電燈の光を得て、室の壁や床の上には怖し氣な物の影が起つた。窓の外には、近くは銀座の街が、輝き渡る目覺しい夜の活動に進入するのであらう。巨大なる富みと榮えの唸り聲は、轟々として幽かに遠雷の如く響いて来る。秀輔の鋭い神經は激しく興奮されたかの様に、其の動かざる瞳子は電燈の上に定められて居た。五分、十分、十五分、深い沈黙は此の如く秀輔の身を蔽ひ盡したが、二十分程経つた時に、梯子段を馳上る音が起ると共に、勢よく障子を明けたのは探訪の大倉である。

「意外に暇取りました。然し、事件は頗る複雑して居ります。」

「さうか。物になりさうか。」

「確になります。わが社は大に手腕を振ふ場合でせう。」

大倉は一見して探訪らしい氣味悪い眼を動し、卑しい骨相をした口元に一種の微笑を浮べたのである。

「よろしい、報酬は充分する。先づ事件の概略をはなして呉れ給へ。」

秀輔は磊落な調子の中に、嚴然として鋭い意氣を示すのである。身軀を斜めに椅子を前に引き出すと、電燈の光は彼が背の方丈けを照らすので、青白い其の面は暗淡として、一段陰險な色を増さしめた。

かのお袖と云ふ少女は、昨夜、秀輔が聞いた通り、浦賀剛藏と云ふ富豪の所有して居る毛織製造所の女工であつた。そして、その父なる彦藏と云ふのも、矢張り此の製造場の職工で、母は卷烟草の内職をしながら、四人の幼い子供を養つて居る。この四人の子供は家族の爲めには一方ならぬ厄ひであつたのみか、去年の暮には稼ぎ盛りの三吉と云ふ兄を、徴兵に取られて了つたので、今は妹のお袖が何かにつけて、一家の望みを背負つて居たのである。お袖は生活の辛苦と過度の勞働に疲らされて、或時は随分この人生を悲觀した事もあつたけれど、近所の者から頻りに働き者だとか親孝行だとか云はれるのを聞くと、云ふべからざる嬉しさを覺えるので、遂にはこの名譽心の満足には何事も顧みないと云ふ風になつて來た。工場の中でも熟練した女工として目指される様になつた

が、其れよりか、其の若々しい血を盛つた容貌は、早くも雇主の剛藏が眼を引く事になつたのである。雇主と云ふのは飽くまで遅しい其の魅力と精力とに因つて、短時間の中に此の宏大な工業上の成功を形造つた人で、年は彼れ是れ四十に近くなつて居るが、其の限り無き力を保有せしめた肉躰は、自然と激しい慾情の爲めに苦しめられる事が多い。で、彼は雇主と云ふ甚だ便利なる權力を應用して、折々女工を自分の部屋に引摺つて行く事があつたけれど、絶對的に黄金の勢力に畏敬して居た彼は、何の苦慮する所なく、若干の適當なる報酬を、汚辱の怒りに泣いて居る女の掌に渡して遣るのである。慙う云ふ風に、彼は何時の間にか、お袖の掌にも、報酬を取らした事があつた。お袖はこの耻しい報酬を得て家へ歸つて來たが、其翌晩、一家の柱であつた父の彦藏が病氣になつた處から、一時泣くにも泣かれず、口惜しい念ばかり籠められたこの報酬は、忽ち非常なる恵みを一家的の上に齎す事になつたのである。母親は最初の中こそ幾分か安からぬ様子をしないでも無かつたが、哀れむべき貧困は渴望して居る黄金の前には如何してその善惡を吟味する餘裕があらう！ お袖は今迄見た事の無い母親の喜びを見ると共に、この報酬を得るのは辭すべき事でないと思つた。此様事からして、お袖は次第に、勞働から得られる賃金の價値を疑ふやうになると、聽て、男に媚びる事や、又自分の容貌を價値付ける事や、賤しい愛情を示す目使ひ杯を覺えるやうになつた。其後に母親は暗い事情を知つたけれど、もう荒立てゝ禁止する勇氣なく、僅かばかりの賃錢の内職を